

「用法・用量」の変更 及び 使用上の注意改訂のお知らせ

高血圧症・狭心症治療薬

持続性 Ca 拮抗薬

日本薬局方 アムロジピンベシル酸塩錠

アムロジピン錠2.5mg「科研」 アムロジピン錠5mg「科研」

Amlodipine Besilate Tab.

このたび、標記製品について、2009年10月19日付で「用法・用量」が変更されました。これに伴い、「使用上の注意」を改訂いたしましたので、お知らせ申し上げます。今後のご使用に際しましては、下記の内容をご参照くださいますようお願い申し上げます。

■改訂内容（ _____：改訂・追記部分、 _____：削除部分）

改訂項目	用法・用量、慎重投与、その他の副作用	改訂区分	自主改訂
	改訂後		改訂前
【用法・用量】	・高血圧症 通常、成人にはアムロジピンとして2.5～5mgを1日1回経口投与する。 なお、症状に応じ適宜増減するが、効果不十分な場合には1日1回10mgまで増量することができる。	【用法・用量】	・高血圧症 通常、成人にはアムロジピンとして2.5～5mgを1日1回経口投与する。 なお、症状に応じ適宜増減する。
・狭心症 通常、成人にはアムロジピンとして5mgを1日1回経口投与する。 なお、症状に応じ適宜増減する。		・狭心症 通常、成人にはアムロジピンとして5mgを1日1回経口投与する。 なお、症状に応じ適宜増減する。	
【使用上の注意】	1. 慎重投与（次の患者には慎重に投与すること） (1)：省略、変更なし (2) 肝機能障害のある患者 〔本剤は主に肝で代謝されるため、肝機能障害患者では、血中濃度半減期の延長及び血中濃度－時間曲線下面積(AUC)が増大することがある。高用量(10mg)において副作用の発現率が高まる可能性がある。増量時には慎重に投与すること。〕	【使用上の注意】	1. 慎重投与（次の患者には慎重に投与すること） (1)：省略 (2) 肝機能障害のある患者 〔本剤は主に肝で代謝されるため、肝機能障害患者では、血中濃度半減期の延長及び血中濃度－時間曲線下面積(AUC)が増大することがある。また高用量(10mg)において副作用の発現率が高まる可能性がある。〕 注)本剤の承認された1日用量は、通常2.5～5mgである。
(3)(4)：省略、変更なし		(3)(4)：省略	

次頁に続く



【お問い合わせ先】 〒113-8650 東京都文京区本駒込2丁目28-8
医薬品情報サービス室 ☎ 0120-519874

改訂後		改訂前	
4. 副作用 (2)その他の副作用 次のような副作用が認められた場合には、必要に応じ、減量、投与中止等の適切な処置を行うこと。		4. 副作用 (2)その他の副作用 次のような副作用が認められた場合には、必要に応じ、減量、投与中止等の適切な処置を行うこと。	
頻度	頻度不明	頻度	頻度不明
分類		分類	
肝臓	(省略、変更なし)	肝臓	(省略)
循環器	浮腫 ^{注1)} 、ほてり(熱感、顔面潮紅等)、動悸、 血圧低下、胸痛、期外収縮、洞房又は房室ブ ロック、洞停止、心房細動、失神、徐脈	循環器	浮腫 ^{注1)} 、ほてり(熱感、顔面潮紅等)、動悸、 血圧低下、胸痛、期外収縮、洞房又は房室ブ ロック、洞停止、心房細動、失神、徐脈
精神・神経系	(省略、変更なし)	精神・神経系	(省略)
消化器	(省略、変更なし)	消化器	(省略)
筋・骨格系	(省略、変更なし)	筋・骨格系	(省略)
泌尿・生殖器	(省略、変更なし)	泌尿・生殖器	(省略)
代謝異常	(省略、変更なし)	代謝異常	(省略)
血液	(省略、変更なし)	血液	(省略)
過敏症 ^{注2)}	(省略、変更なし)	過敏症 ^{注2)}	(省略)
口腔 ^{注2)}	(省略、変更なし)	口腔 ^{注2)}	(省略)
その他	(省略、変更なし)	その他	(省略)
注1) 10mgへの増量により高頻度に認められたとの報告がある。		注1) 高用量(10mg)において高頻度に認められたとの報告がある。 (本剤の承認された1日用量は、通常2.5~5mgである。)	
注2) このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。		注2) このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。	

次頁以降に改訂後の使用上の注意全文を掲載しておりますので、併せてご参照ください。

■改訂理由

用法・用量の一部変更承認を取得したことに伴い、2009年5月に暫定的に改訂した「使用上の注意」を先発医薬品の記載と同様な内容に改めました。

なお、改訂内容につきましては、日本製薬団体連合会発行の「DRUG SAFETY UPDATE 医薬品安全対策情報(DSU) No.184」(2009年11月)に掲載されます。

【使用上の注意】（下線部改訂部分）

【禁忌（次の患者には投与しないこと）】

1. 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人
〔「6.妊婦、産婦、授乳婦等への投与」の項参照〕
2. ジヒドロピリジン系化合物に対し過敏症の既往歴のある患者

＜効能・効果に関連する使用上の注意＞

本剤は効果発現が緩徐であるため、緊急な治療を要する不安定狭心症には効果が期待できない。

【使用上の注意】

1. 慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）
 - (1) 過度に血圧の低い患者
〔さらに血圧が低下するおそれがある。〕
 - (2) 肝機能障害のある患者
〔本剤は主に肝で代謝されるため、肝機能障害患者では、血中濃度半減期の延長及び血中濃度－時間曲線下面積（AUC）が増大することがある。高用量（10mg）において副作用の発現率が高まる可能性があるので、増量時には慎重に投与すること。〕
 - (3) 高齢者
〔「5.高齢者への投与」の項参照〕
 - (4) 重篤な腎機能障害のある患者
〔一般的に腎機能障害のある患者では、降圧にともない腎機能が低下することがある。〕
2. 重要な基本的注意
 - (1) 降圧作用に基づくめまい等があらわれることがあるので、高所作業、自動車の運転等危険を伴う機械を操作する際には注意させること。
 - (2) 本剤は血中濃度半減期が長く投与中止後も緩徐な降圧効果が認められるので、本剤投与中止後に他の降圧剤を使用するときは、用量並びに投与間隔に留意するなど患者の状態を観察しながら慎重に投与すること。

3. 相互作用

併用注意（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
降圧作用を有する薬剤	相互に作用を増強するおそれがある。慎重に観察を行うなど注意して使用する。	相互に作用を増強するおそれがある。
リトナビル	本剤のAUCが上昇することが予想される。	リトナビルとの併用により、本剤の代謝が競合的に阻害される可能性が考えられる。

4. 副作用

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

(1) 重大な副作用（頻度不明）

1) 肝機能障害、黄疸

AST(GOT)、ALT(GPT)、 γ -GTPの上昇等を伴う肝機能障害や黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

2) 血小板減少、白血球減少

血小板減少又は白血球減少があらわれることがあるので、検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

3) 房室ブロック

房室ブロック（初期症状：徐脈、めまい等）があらわれることがあるので、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(2) その他の副作用

次のような副作用が認められた場合には、必要に応じ、減量、投与中止等の適切な処置を行うこと。

分類	頻度	頻度不明
肝 臓		ALT(GPT)、AST(GOT)の上昇、肝機能障害、ALP、LDHの上昇、 γ -GTP上昇、黄疸、腹水
循 環 器		浮腫 ^{注1)} 、ほてり（熱感、顔面潮紅等）、動悸、血圧低下、胸痛、期外収縮、洞房又は房室ブロック、洞停止、心房細動、失神、徐脈
精神・神経系		眩暈・ふらつき、頭痛・頭重、眠気、振戦、末梢神経障害、気分動揺、不眠
消 化 器		心窩部痛、便秘、嘔気・嘔吐、口渇、消化不良、下痢・軟便、排便回数増加、口内炎、腹部膨満、胃腸炎、膵炎
筋・骨格系		筋緊張亢進、筋痙攣、背痛、関節痛、筋肉痛
泌尿・生殖器		BUN上昇、クレアチニン上昇、頻尿・夜間頻尿、尿管結石、尿潜血陽性、尿中蛋白陽性、勃起障害、排尿障害
代謝異常		血清コレステロール上昇、CK(CPK)上昇、高血糖、糖尿病、尿中ブドウ糖陽性
血 液		赤血球、ヘモグロビン、白血球の減少、白血球増加、紫斑、血小板減少
過 敏 症 ^{注2)}		発疹、そう痒、蕁麻疹、光線過敏症、多形紅斑、血管炎、血管浮腫
口 腔 ^{注2)}		（連用により）歯肉肥厚
そ の 他		全身倦怠感、しびれ、脱力感、耳鳴、鼻出血、味覚異常、疲労、咳、発熱、視力異常、呼吸困難、異常感覚、多汗、血中カリウム減少、女性化乳房、脱毛、鼻炎、体重増加、体重減少、疼痛、皮膚変色

注1) 10mgへの増量により高頻度に認められたとの報告がある。

注2) このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。

5. 高齢者への投与

高齢者では一般に過度の降圧は好ましくないとされていること及び高齢者での体内動態試験で血中濃度が高く、血中濃度半減期が長くなる傾向が認められているので、低用量(2.5mg/日)から投与を開始するなど患者の状態を観察しながら慎重に投与すること。

6. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

(1) 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には投与しないこと。

[動物実験で妊娠末期に投与すると妊娠期間及び分娩時間が延長することが認められている。]

(2) 授乳中の婦人への投与は避けることが望ましいが、やむを得ず投与する場合は、授乳を避けさせること。

[動物実験で母乳中へ移行することが認められている。]

7. 小児等への投与

低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児に対する安全性は確立していない(使用経験が少ない)。

8. 過量投与

症状: 過度の末梢血管拡張により、ショックを含む著しい血圧低下と反射性頻脈を起こすことがある。

処置: 心・呼吸機能のモニターを行い、頻回に血圧を測定する。著しい血圧低下が認められた場合は、四肢の挙上、輸液の投与等、心血管系に対する処置を行う。症状が改善しない場合は、循環血液量及び排尿量に注意しながら昇圧剤の投与を考慮する。本剤は蛋白結合率が高いため、透析による除去は有効ではない。

また、本剤服用直後に活性炭を投与した場合、本剤のAUCは99%減少し、服用2時間後では49%減少したことから、本剤過量投与時の吸収抑制処置として活性炭投与が有効であると報告されている。

9. 適用上の注意

(1) 分割後

分割後は早めに使用すること。分割後に使用する場合には、遮光の上30日以内に使用すること。

(2) 薬剤交付時

PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。(PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔を起こして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている。)

10. その他の注意

因果関係は明らかでないが、本剤による治療中に心筋梗塞や不整脈(心室性頻拍を含む)がみられたとの報告がある。



発売元
科研製薬株式会社
東京都文京区本駒込2丁目28-8

製造販売元
ダイト株式会社
富山県富山市八日町326番地